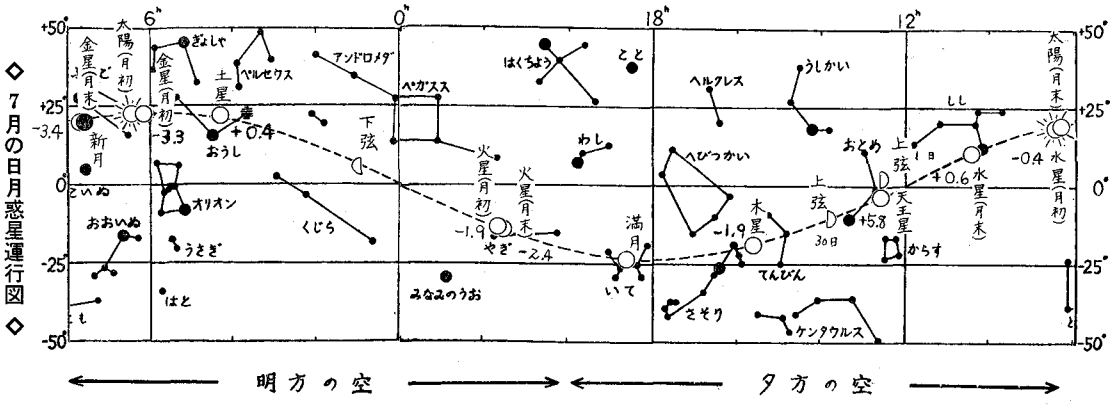
◇ 7月の天文暦 ◇

日	時	記　　事
1	3	**上　弦**
4	13	地球遠日点通過
8	4	小　暑（太陽黄経 105°）
	20	**望**
13	0	月　最近
	12	火　星　留
15	15	**下　弦**
22	18	**朔**
23	21	大　暑（太陽黄経 125°）
25	12	木　星　留
28	12	月　最　遠
30	7	水　星　東方　最大離角
	20	**上　弦**

A. アンダーヒル

星の分類に活躍したモーリー，キャノン両女史を始めとして，昔からアメリカには女流天文学者は多い．今でもアメリカ天文学会の年会に出席すると，博士号を目指しているような若い女性の講演がいくつも聞ける．しかし，現役の女流天文学者の筆頭はアンダーヒルであろう．カナダ人である．ブリティッシュ・コロンビア大学を卒業後，ヤーキス天文台で学位をとり，その後ヴィクトリア天文台に移った．数年前からオランダ・ユトレヒトのゾンネンボルグ天文台にいたが，昨年秋から米国航空宇宙局のガダード・宇宙飛行センターに居る．専門は早期型星のスペクトル解析で，標準の O・B 星についても，ウォルフ・ライエ星，Be 星等の特異星についてもいくつもの論文があり，

“The Early Type Stars” という本も書いている．ウィルソン山天文台の宿舎は別名を “Monastry” (僧院) といい，以前は女人禁制であった．1950 年代のある年，彼女がウイルソン山天文台に観測を申しこんだが，女人禁制を理由にことわられてカンカンに怒ったという話は有名である．この規則はその後撤廃され，現在では彼女より有名でない女流天文学者も観測を行なっているということである．彼女自身がその後ウイルソン山で観測したかどうかはしらない．

私はアメリカ滞在中にいろいろな会議に出席するように心掛けたが，分野が同じせいもあって，どの会議でもアンダーヒル女史に会った．彼女はどの会議でも活発に意見を発表する．また，会合を組織することにも熱心で，それらのほとんどの会議の発起人に名を連ねていた．会議中の彼女はちょっとこわいような印象を与えるが，休憩時間に会って話した感じでは反対で，非常に親切な人のようである．ここに紹介する写真はトリエステの会議の後，空港行きのバスを待つ間にうつしたものである．そのころはオランダにいたころで，「大学ではオランダ語で講義している」などと話していた．　(成相恭二)

次号はバービッジ夫妻の紹介の予定です．